



「好きだから描かない」というパラドックス。

劇場用長編デビュー作『運命じゃない人』が、2005年のカンヌ国際映画祭・批評家週間で4賞を受賞、大きな話題となった内田けんじ監督。周到に練られた脚本から生まれるその作品世界と語り口は、日本映画界に新鮮な驚きをもたらした。

そして2008年5月。待望の新作『アフタースクール』は、2年間の熟成を経た脚本に快調なテンポが加わり、まったく先の展開が予測できないエンターテインメント作品に仕上がっている。ロードショー公開を間近に控えた内田監督に話をうかがった。



映画監督

Kenji Uchida
内田けんじさん



どうも、苦しまないとダメなんですね。 必ず苦しみは通過しないといけないみたいです。

アイデアが生まれる「瞬間」

■前作、『運命じゃない人』もそうですが、内田監督の作品には、とにかく脚本が徹底的に練りこまれているという印象があります。今回は、脚本の完成までに2年かかったということなのですが、一口に2年といっても、その2年間のリアルな中身というのがどんなものなのか、興味があります。

もちろん、2年間ずっと机に向かっていただけ

ではなくて、「ああ、もうダメだ」と蒲団かぶって寝込んでた時もあります(笑)。ただ、常にカバンにノートは入っていましたし、他の仕事をしている時、映画を観ている時、本を読んでいる時、いつでも意識の隅にはあるわけです。集中して考え出すと、小説を読んだりできなくなる期間が出てくるんですね。他のことは何も考えたくないというか。

■そんな中で、アイデアが出てきたり、脚本が前に進む時というのは、どういう時間なのですか？

何日間かずっと考えますよね。その時はどうにもダメなんです。で、そのあと、フツと意識が切れるような瞬間、例えばボーッとテレビを観ている時なんか、「あ、こうすればいいのか」なんて湧いて出てくるんです。経験から言えることは、どうも、苦しまないとダメなんですね。ただボーッとテレビ観てる、そこだけじゃやっぱりダメで。必ず苦しみは通過しないといけないみたいです。

■内田さんが脚本にそれだけ力を注がれるのは、これは邪推ですが、映像重視の同時代の他の映画に対するアンチテーゼ、みたいな気持ちがあったのでしょうか？

ぼくも自主映画から出発したわけですが、自主映画をたくさん観ていて、ちゃんと脚本が書かれている映画ってほんとに少ないんですね。物語として魅力的な自主映画は非常に少ない、という言い方をしてもいいです。ですから、「アンチ」というよりは、とにかく脚本をキチンと書くことができれば、差別化が図れると思えました。ぼく自身、物語を語る道具としての映画、というものにとっても惹かれますし、語り口のいい映画が好きですから。

違和感を楽しむ

■今回の『アフタースクール』は非常にテンポが良くて、これはもちろん意図されたものだと思いますが、こうしたテンポの良さということも、今おっしゃった「語り口の魅力」とつながっていきますか？

いやいや、必ずしもそうではなくて、テンポが良くなかったって、どうにも惹きつけられる映画というのはあるわけです。映画というのは、2時間なら2時間、観客から時間を奪う行為ですが、その時間、飽きない映画と飽きてしまう映画がある。ぼく自身、非常に飽きっぽいのですが、特になにも起こらないように見えるとてもシンプルな映画、

PROFILE

内田けんじ | うちだけんじ

1972年神奈川県生まれ。サンフランシスコ州立大学芸術学部映画科で、8ミリから35ミリまでの製作技術ならびに脚本を学ぶ。帰国後に撮った自主映画『WEEKEND BLUES』が第24回びあフィルムフェスティバル「PFFアワード2002」で企画賞、プリリアント賞を受賞する。続く第2作にして劇場映画デビュー作『運命じゃない人』が、カンヌ国際映画祭でフランス作家協会賞以下4賞受賞、同作品は日本国内でも8つの賞を獲得して、一躍脚光を浴びた。3年ぶりの待望の新作『アフタースクール』が、いよいよ5月24日(土)より全国ロードショー公開される。



映画を作る人間として、 少しでも映画の秘密に近づきたい。

例えば小津映画(※1)など、時間を忘れて見入ってしまう。あれはいったい何なんだろうと。ああいうところに映画の秘密が隠されていると思います。おそらく、感情移入なんですね。うまい映画というのは必ず、自然と観客が感情移入できるように作られています。

■その映画の秘密や感情移入というのは、脚本とかテンポとか、そういうところに還元できないものなんですか？

少なくとも、脚本の問題だけではないし、テンポが転がれば良いという問題じゃないですよ。ただぼくは、映画を作る人間として、自然に感情移入できる映画をめざしたいですし、少しでも映画の秘密に近づきたい。いまのところ、まだぜんぜんわかっていないと思いますし、もしかしたら一生わからないかもしれませんが、そのあたりに映画の魅力の何かがある、っていう感触はあります。

■今回、大泉洋さん、佐々木蔵之介さん、堺雅人さんの男性3人はもちろん、常盤貴子さん、田畑

智子さんと、非常に魅力的なキャストが揃いました。

キャストは、キャスティングの方、それからプロデューサーと一緒に決めていくんですが、俳優の固有名詞が口にされた時、「あ、その人は違うな」「あ、いいかも」という判断は、ほとんど瞬時にできますね。ぼくはアテ書き(※2)をしないので、キャスティングはまったくゼロからのスタートになるんですが、「あ、いいかも」という名前が出された時は独特のワクワク感があります。

■アテ書きはしなくても、イメージはあるわけですよ？

もちろんあります。ただ、ぼくのイメージに100%ピッタリの方なんて、絶対にはいないわけです。だから、大なり小なり違和感があるんですけど、その違和感には良い違和感と悪い違和感があるんです。良い違和感というのは、もしその人がこの役をやってくれば、自分のイメージをいい具合に壊してくれる、ちょっと違うものを見せてくれるんじゃないかという楽しい予感で

すよね。だから逆に言うと、かなりぼくのイメージに近い俳優さんもいらっしゃるんだけど、その場合はある程度想像がついちゃうというか、わかっちゃうというか、それはつまらないんです。

「男のリアクション」から見える風景

■自主製作された『WEEKEND BLUES』と前作の『運命じゃない人』、そして『アフタースクール』と、3部作と呼ばれることもあるわけですが、いただいた『アフタースクール』のプレス資料の中に、とても興味深い記載がありました。監督ご自身が3作品の共通点を聞かれて、「一番は、男性が女性に対して起こすリアクションを描いているということだと思います」とお答えになっている。そうか、あれはアクションじゃなくてリアクションなんだ、と考えたらまた風景が違って見えます。

もちろん、はじめから3部作を意図して作ったわけではありませんが、分析するとそういうことになるのかなあと。ぼくはもともと、女性を描こうという気がないんだと思うんですね。

※1 日本が世界に誇る名匠・小津安二郎監督作品のこと。特別な事件や大きなドラマのない、小市民の日常の起伏を描いた作品が多いが、そこにはまさに映画固有の豊かさが詰め込まれている。

※2 あらかじめキャスティングされた俳優に「当てて」脚本を書くこと。もしくは俳優が決まっていなくても、ある特定の俳優の出演を希望して、その俳優のイメージで脚本を書く場合にも用いることがある。

■……それはなぜですか？ と、いう質問が成立するのかな(笑)。

たぶん、女の子が好きだからだと思うんです。ほとんどの場合、「描かない」という仕方でも女性を中心に据えているのだと思います。どうせ男が思い描く女性像なんて勝手なもので、勝手に美化したり、卑下したりしている。だったらその右往左往ぶりとか、実は自発的なアクションじゃなくてリアクションであるものを見せて、そういう男たちの側にある女の子だけでいいって、わりと早い時期から割り切っちゃったような気がします。

■ははあ……。いまちゃんと理解できている自信は正直ないですが(笑)、中心に据えるということと、描くということが別のことだというのはわかりました。

そう。だからパラドックスなんですね。いちばん大切なものだからどうでもいいって言うか……。女の子は、ぼくが映画作家として造形して提示する、ということをしたくないんですね。あくまで距離感だけを見せたい。大学で脚本の先生に、「最初は、あまりムリせずに自分がいちばん興味があるものを主題にすればいいんだ」って言われて、さてオレにとってのいちばんは何だろうってしばらく考えたら……女の子だったんですね(笑)。で、その時ほとんど同時に、「女の子

を主題にするんだったら、女の子を中心に描きたいじゃないんだ」って気持ちも出てきました。

日米の現場の相違

■いま大学のお話が出ましたが、サンフランシスコ州立大学ですよ。これは、日本の大学ではダメだということですか？

いや、たまたま機会と状況があっただけです。でも、古い友人に言わせると、「おまえは中学の頃から、留学、留学って言ってたよ」ということなんです……。自分では「そんなにこだわってたっけ？」という感じですけども。

■日米の映画製作の現場の相違ですとか、そこから見えてくる日本映画、というものは？

長所と短所っていうのはある意味、表裏一体だと思うんですね。日本のほうが、チームというか、1本の映画の完成に向けて結束が固くて、皆さんほんとお金じゃない、溢れるほどの熱意で係わってくれる。「寝ないでやる」のが美德みたいなところがあって(笑)、でもそれはどこかでムリがたたることもあるでしょう。いっぽうアメリカは、これはプロフェッショナル集団ですね。決められた時間までしかやらないし、休みはキッチリ取るし、専門外のことはやってくれない

けど、でもクオリティはキープしてくれますよね。

■内田さんのところは、いわゆる「内田組」という感じなんですか？

とんでもない。今回の『アフタースクール』でも、皆さん、初めて組むスタッフさんばかりですし、とにかく監督がいちばん何もできないってことがわかってるんで(笑)、おんぶに抱っこですとぼくが甘えてました。ほんとうに、素晴らしいスタッフさんたちばかりです。

■さて、いよいよ5月24日からロードショー公開が始まります。

はい。ぼくはもうずっとこの脚本に付き合ってきて、オチも知っているし、初見の皆さんの気持ちというのは、これは想像するしかないんですけど、とにかくまさるな気持ちで楽しんでいただけたらと思います。いまの日本映画の中でも、かなり魅力的なキャストが並んでいると思いますし、期待していただきたいと思います。

■ありがとうございました。

Text by : 直哉モレットイ



アフタースクール

母校で働く人の良い教師・神野(大泉洋)のもとに、かつての同級生だと名乗る怪しい探偵(佐々木蔵之介)が訪ねてくる。探偵は神野の親友であり、やはり同級生、そして一流企業のサラリーマンである木村(塚雅人)の行方を追っていた。いつのまにか神野は、心ならずも探偵と一緒に木村探偵に巻き込まれることになり、そして知られざる木村の一面が次々に明らかになっていく……。

長編デビュー作『運命じゃない人』で注目された内田けんじ監督待望の最新作。仕掛けたっぷり、驚きの展開、最後の最後まで目が離せないフル回転エンターテインメントムービーの誕生である。

【出演】大泉洋 佐々木蔵之介 塚雅人 田畑智子 常盤貴子 北見敏之 山本圭 伊武雅刀 ほか

【監督・脚本】内田けんじ

上映時間 102分 ©2008「アフタースクール」製作委員会

5月24日(土)、渋谷シネクイント・池袋HUMAXシネマズ4ほか全国ロードショー